歴代墓誌銘にみる書法の変遷⑦

司馬景和妻孟敬訓墓誌（しばけいわさいもうけいくんぼし）

延昌三年(514)
(北魏時代)

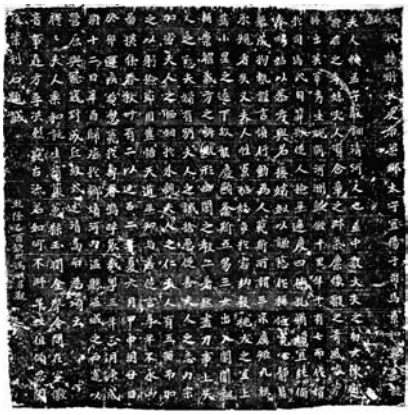
木雞室
伊藤　滋

近代になり、北魏時代の墓誌は実に多くのものが出土してきた。長い間地下に埋められていたために、誌面に刻された文字は、善く保存されている。六世紀の六朝書道研究の重要な資料とされている。今回紹介する「司馬景和妻孟敬訓墓誌」は、十八世紀に発見され、近年まで伝えられていたが、現在は行方不明である。早い時期に出土したが、拓本はそれほど流布していない。やや小振りな文字であるが、非常に大胆で、切れ味の鋭い見事な楷書である。右頁に示した選字図版Aは、字形構成の安定した書風を示した。後世の天平時代の写経体を彷彿とさせる。ところが、選字図版Dのように左払いが特に強調されているもじもあれば、Cのように左に大きく傾斜するような字形構成を示すものもある。Bのように点画の連結するもの、仔細に観察すると多彩な趣を示している。先人が、一見しただけでは、この書の妙味は感じられないが、じっくりと鑑賞すると書法三昧のおもしろみが理解できると評している。ここに示した拓本（擦拓の精本）のように字画が鮮明に拓されたものは少ない。

図版②
（図版A）

（図版D）　（図版C）　（図版B）

図版③



次号は北魏時代の「張黒女墓誌銘」です。

この欄に関するご批評、ご意見、ご希望、ご質問などをお聞かせください。私宛に直接メールで、また編集部宛にお送りただければ幸いです。

伊藤　滋　メールアドレス
mokkei@galaxy.ocn.ne.jp

図版①

（原寸）

東北関東大震災により被災されました地域会員の皆さまに謹んでお見舞申しあげます。

また、一日も早い復興を祈念いたしております。

財団法人　書道芸術院
会　長　恩地　春洋
理事長　辻元　大雲
役　員　一　同

★第64回書道芸術院東日本展は中止となりました。

東北関東大震災により宮城県は多大の被害を受けました。開催予定（平成23年４月１日～６日）のせんだいメディアテークも被害を受けた模様です。このような状況では開催は難しいと思われますので、第64回書道芸術院東日本展を自粛し中止いたします。

★第63回全国学生書道展の変更について

仙台メディアテークを会場として予定しておりましたが、下記のとおり変更し実施いたします。

日程場所変更

開催日時	平成23年７月29日（金）～８月２日（火） 午前10時～午後５時（最終日午後２時まで）
表 彰 式	平成23年７月29日（金）午後１時～
開催場所	東京都立産業貿易センター（浜松町館） 〒105-0022 東京都港区海岸１丁目７－８　電話 03-3434-4242

★大震災義援金ご協力のお願い

一口1000円単位で義援金を募ります。詳細は、審査会員候補以上の皆様にご通知いたしましたので、ご理解の上ご協力をお願いいたします。

無鑑査の方、一般の方でもご協力いただける方がおられましたら、社中取りまとめをお願いいたします。

皆様からいただきました義援金は書道芸術院会員の被災された方にお届けいたします。

書のひろば

理事長　辻元大雲

東北関東大震災発生　未曽有の大惨事に。　義援金のご協力を

3月11日（金）14時46分、東北三陸から福島県に至る600キロに及ぶ沖合にマグニチュード9.0という世界にも例を見ない巨大地震が発生、それに伴って沿岸に大津波が押し寄せ、3月23日現在死者行方不明2万2000人を超える大惨事となりました。連日のニュースなどで皆さんご承知のことと思います。亡くなられた方々に心よりご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された方々にお見舞い申し上げます。

書道芸術院会員の方々も北日本・東北方面に約1000人おられ南関東千葉・茨城にも被害が及んでおり、多数罹災されたことが予想されます。現在被害状況を団体指導者の先生方に調査依頼をお願いしておりますがまだ状況はよくつかめておりません。できるだけ早く状況を把握したうえで、院としてできる救援活動を展開したいと思っております。災害義援金のお願いを既に院審査会員候補以上の方々全員に差し上げました。4月末日集約を目途に、全国の会員の皆様方の暖かいご支援ご協力を是非ともお寄せくださるようお願い申し上げます。無鑑査・一般公募の皆様には各団体責任者、院審査会員候補以上の先生方にお寄せいただければ幸甚です。ご協力よろしくお願いします。

なお今回の災害義援金募集は各種団体でも行われており、毎日書道会でもまもなく展開する予定になっております。同様趣旨ですがご協力できる範囲での対応をお願いします。

院の緊急対応について

前頁に掲載の通り、64回書道芸術院東日本展（仙台メディアテーク）の中止、63回全国学生書道展の会場・会期変更を決定しました。ご了解ください。

なお、3月13日に予定されていました評議員会、理事会は急きょ中止させていただき、平成23年度事業計画、予算案などを書面にて提案、ご意見を集約して議決させていただき、議事録の作成を行いました。5月15日開催予定の評議員会、理事会を経たうえでご報告する予定です。詳細は「書道芸術」6月号掲載予定の院報をご覧ください。

平成23年度の主な事業計画

・第65回記念書道芸術院展　中央展・西日本展・東日本展の3会場で開催予定。

・秋季展　本年と同じ内容のほか、新しく「秋季展企画推薦作家展」をアートサロン毎日を会場として同会期で5名選抜して開催する。

・第63回全国学生書道展　会場を仙台から浜松町の「都立産業貿易センター」に変更する。会期7月29日～8月2日

・単位認定講習会　7月30・31日高岡

・創立65周年記念事業への取り組み

・財団評議員任期満了による改選

・審査会員への特別選考実施（5月）

「書道芸術」600号発行

「書道芸術」今月号は記念すべき600号となりました。

・創刊号　昭和32年（1957）刊行

・100号　昭和43年（1968）10月

・200号　昭和52年（1977）12月

・300号　昭和61年（1986）4月

・400号　平成6年（1994）8月

・500号　平成14年（2002）12月

・600号　平成23年（2011）4月

これまでの歴史は大変なものです。

歴代編集長

・創刊から16号　中島邑水

・17号から33号　香川峰雲

・34号から260号　種谷扇舟

・261号から587号　恩地春洋

の各先生方でした。先達の方々のご努力でここまで継続できました。今後さらに充実発展できますよう会員諸氏のご支援、ご協力をお願いします。

エコ再生紙運動へのご協力を

昨今資源保護の運動としていろいろなエコ活動が行われていますが、我が書道関係としてこのほど使用済みの書道半紙や画仙紙を再生し、エコ半紙として活用する運動が始まりました。主催するのは一般社団法人「エコ再生紙振興会」（〒100－0014　東京都千代田区永田町2－17－10サンハイム801　TEL03－3593－1155　FAX03－3593－1454）

これには毎日書道会、日本郵政公社も協力することになっている。既に神奈川県では本格的に学校現場から出る書写で使用した反古紙を回収し書道半紙として再生活用している。

本院も「書の教室」「書道芸術」誌に寄せられた競書を審査後一定期間の保存期間を過ぎた作品を提供し、再生紙の原料としての活用を本年2月から行って協力している。

再生半紙1㌢（1000枚）1575円（送料別）6㌢10000円（送料込）で購入できます。見本請求、申し込みは振興会へ。

全日本書道連盟夏期書道大学

㈳全日本書道連盟が毎年行っている夏期書道大学はここ3年間会場が変動していたが、本年から以前の永田町「全共連ビル」改修完了に伴い戻ることになった。本年は8月5日～7日に実施予定で、講座は漢字各体、かなど実技中心に行われる。詳細は連盟へ。

全書連書道振興助成事業について

都道府県または市町村単位の書道組織による講演会、講習会への助成事業の活用を。同じく詳細は全書連へ。

・全書連　TEL03－5294－1371

書道芸術院
平成の群像（2011）

津田和秋展 ――― この「みち」に生きる ―――

津田海仙

「これでいいのか」この道を求めて

帰省し就職して、三年程経って、浜谷芳仙先生宅で学生書道展の作品を書いている妹を迎えに行った折、師と再会。毎日展・県展の作品制作中の師と出合う。大きな筆、大画仙紙に取り組んで制作をしている。書き終えた作品に興味深そうに見ていると、「やってみるか」との声に、おもしろそうだから「やる」と答えた。これが前衛書を始めたきっかけである。以来、がむしゃらに前衛書を書き続ける。

当時、造形ばかり追いかけて満足していた時、研修会で、中島邑水・深松海月両先生より、浜谷芳仙先生が口癖の〝古典研究を第一義にし、文字の源流を遡って書の根源を学ぶべきだ〟の教えで古典を学書する。古典によって「線と造形の組み合わせ」について考えるようになる。

中島邑水先生の堂々たる自己表現。深松海月先生の水の流れを想わせるような流麗な作。浜谷芳仙先生の人生の厳しさを訴える表現の作を見直し、線と造形がマッチしていればこそ観る人々に感動を与える作品が生まれるのだと感じとった。

還暦も過ぎ、立場も変わった今、師芳仙の教えを胸に、今、何をすべきか考え、焦点化して追求すべきだと思いを強くしている。

この度、地域文化功労者として文部科学大臣表彰を受けられた記念にと、「師」浜谷芳仙先生より「号」を授けられました。

「和秋」改め、
号「海仙（かいせん）」　心は大海の如し

21世紀の書
―私の主張―

現代詩文書 (一)

佐藤無極

昨年末に突然原稿の依頼を受け、不得手な私には大変な驚きと、困惑をいたしております。これより稿を書せていただきますが、無事終稿することができるか否か大変心配をいたしておりますが、貴重な場をいただきましたことに感謝し、これまでを振り返り、今後の道標となるものを探ってみたいと思います。

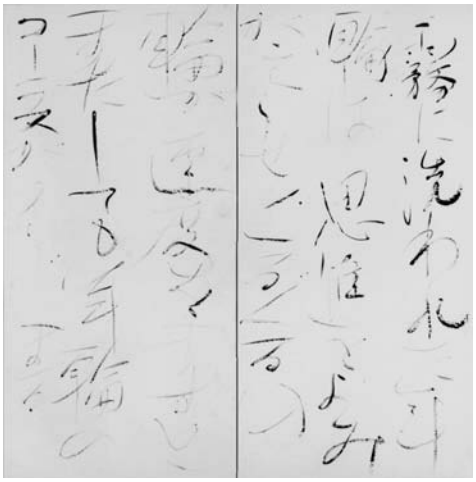
現代詩文書との出合いは、師（故浜田一堂先生）の指導を受けておりましたので、自然というか、当然のように進んできたのだと思っております。

師をはじめ宮城野書人会の諸先生方も故加藤翠柳先生ご指導の羊毛、長鋒、超長鋒、濃墨で粘り強い線、渇筆の美しい作を発表されておりました。

掲載作は、昭和41年、第19回書道芸術院展初出品作です。芸術院が創立された、1947年は私が生まれた年ですので、19才の時の作です。

今、思えばそのころ私などは明確な意志も持たず、ただただ書いていたように思います。

当時院展では、二曲、四曲等大きい作品が多く、長鋒濃墨で書く力量もないのに、無謀にも私も二曲に挑戦したのですが、書くべき筆も持っておらず師の大事な筆を拝借して書いたもので、よく師より書線は引いて書くな、押して書きなさいとのご指導をいただきながら書いたもので、これは自分の力ではなく、拝借をした師の良筆が書いてくれたものと思います。



佐藤利満（無極）書　（年輪のコーラス）

第19回書道芸術院展出品

かな (一)

大辻多希子

出合い

かな書道を始めて20年余りになりますが、現在に至るまでの過程を少し書きたいと思います。

子供と歩いて通える範囲、という事で、近くにある書道塾に通い始めました。

昭和47年頃と記憶しています。

漢字を主とした会でしたが、かなもありました。県展などの公募展には参加はなく、一年に一度、展覧会のために、師風を追随するだけの練成会を行っていました。

与えられた手本に、かな作品があり漢字とはまた違う流麗さに魅力を感じ次第に、かなへの想いが強くなって行きました。創作の指導はないため、質問をしても真似ていれば良い、という会の中で、深く学びたいと思い、専門の師を求め乍ら数年を過ごしました。

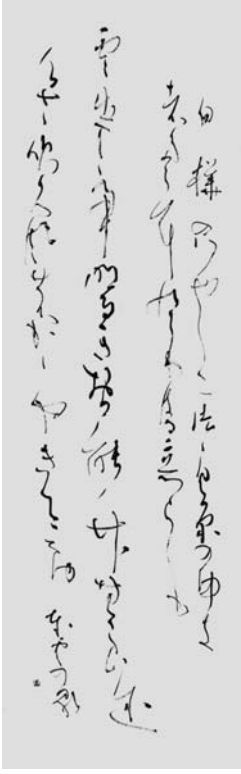
その後、亡き下谷東雲先生、そして洋子先生へと引き継がれた、書泉会に入門する決心をしました。

入門した当時、すでに生徒を持っておりましたので、師を変える事は大変でした。

美しい料紙に、流麗な作品を書ける楽しさを味わい、しなやかさの中に凛とした線が作品を際立たせるお手本に魅了されました。

20数年前の、勇気と決断がなければ、下谷洋子先生との出合いはありませんでした。

かな作品の創作に没頭し、充実した日々を送れる幸せに感謝しております。



大辻多希子書　書泉会展出品　平成13年（カトレアサロン）

書話シリーズ 396

思い出の作

石倉麗扇
（漢字部・審査会員）

一年の計画を立てることは、どなたでもすることですが、それを実行に移すことはなかなか困難なことです。私は泥棒をつかまえて縄をなう方ですので、何時も押し迫ってからバタバタと忙しく作品に挑戦します。最終的には無理しないように自分に妥協して終わることになります。出来上った作品にもその様なところが見受けられて恥しい限りです。でも老後淋しい思いをしなくて済む様にと思って竹扇会に入会をさせていただき大字書から小品に至るまで様々な字を書かせていただいて楽しい思い出を作ることができ、とても充実した老後を送っています。

(1)は第42回竹扇会書展に出品した作品で、全紙縦使いのサイズに迷わず選んだ語句です。「萌」は芽を出す。めざす。もやす。不動のさまです。私の孫の名前でもあり、勢い力が入りました。草かんむりに「月」を近づけたのは完成間近かのことで、その前の段階では「⊙」を上下させてバランスをとろうと苦労をしていました。残雪に芽を出し始めた草木の生命の力強さを孫の名前に託した両親や祖父母の気持ちを表現してみました。

(1)「萌」

石倉麗扇書

(2)書道芸術院展出品

石倉麗扇書

(2)は私が書道芸術院の審査会員になって、はじめて出品した作品です。審候の時は長尺に多字数作品を出品していましたので、一字書の出品は下調べに時間を費やしました。「竹」冠の文字に心をひかれて、「第」を素材にしました。（弟を略した形で竹は後で加えたもの、下だけで革を順にたばねることを示す）とあるのを読んで漢字のなりたちの面白さを感じ紙面一っぱいに力強さの表現と余白に意を用いました。

(3)は第58回毎日書道展に出品した「新」です。直線のみの文字で変化をつけることの難しさを味わいました。一筆目の蔵鋒が成功すれば、ほっとするといった具合で、今までで一番難しい素材でした。これからも、たゆまず努力をしつづけたいと思っています。

(3)第58回毎日書道展出品

石倉麗扇書

第64回書道芸術院展〈1〉

峰雲賞

尾形澄神

現代詩文書部
尾形澄神

初めて書道芸術院展に出品したのが42回展のときです。佳作賞をいただきました。入賞通知を手にしたとき、あまりのうれしさに飛び上がったことを覚えています。あれから22年の時を経て、この度の受賞を厳粛に受け止めております。喜びだけではない何かが、去来するものが心の奥底にあります。

白扇書道会に入り、種谷扇舟先生の下、多くの先輩方に影響を受けながら書の道を歩んできました。純粋な気持ちで書と向き合うことが出来、書作に専念できる白扇会の組織と環境に身を置けたことは本当に幸せでした。その過程で院の事務局に勤めた8年間、恩地先生や辻元先生、諸先生に鍛えられ学んだことが現在役立っています。

来し方を振り返り、たくさんの先生方に支えられてきたことに感謝し、授賞式に臨みました。有難うございます。

書道芸術院大賞

漢字部
上田多恵子

この度、第64回書道芸術院展におきまして栄えある大賞をいただきありがとうございます。これもひとえに熱心にご指導いただいた恩地春洋先生、小林琴水先生をはじめ諸先生方のお陰と深く感謝申し上げます。

勉強不足で未熟な私が、このような賞をいただき喜びよりも不安でいっぱいです。小林先生は、個性を大切にされ私たちの性格をよく理解し、よく誉めてくださいます。その言葉を励みに切磋琢磨し努力してまいりました。その甲斐あって筆の動きによってできる線の変化や息づかいを考えながら書くことがおもしろく、また楽しく思えるようになりました。これからは、受賞を新たな出発とし、自己表現できるよう一歩ずつ精進してまいりたいと思います。今後共、ご指導よろしくお願い致します。

上田多恵子

書道芸術院準大賞

かな部　岡部照芳

前衛書部　藤原紅雲

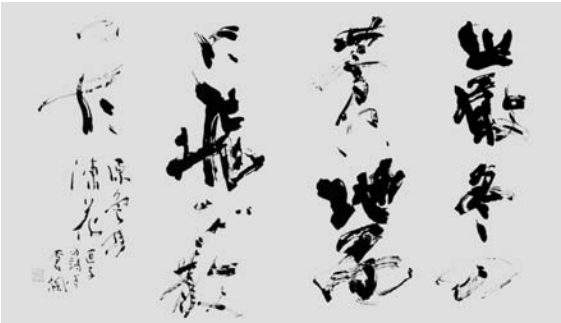
現代詩文書部　新宮文葉

漢字部　松村秀扇

現代詩文書部　加藤紫翠

白雪紅梅賞

前衛書部　佐々木　祐　子



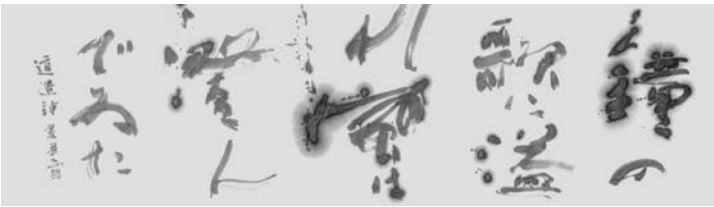
現代詩文書部　佐々木　蒼　楓

前衛書部　小野寺　三　枝

漢字部　中原雪華

漢字部　佐藤桂香

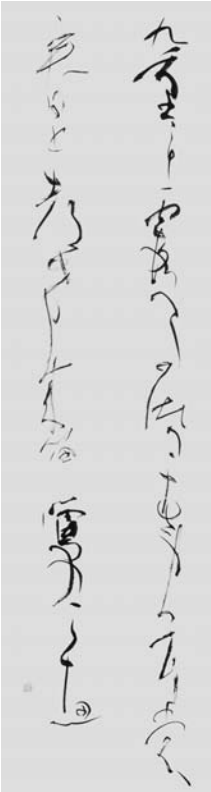
白雪紅梅賞



現代詩文書部　乙倉翠芳

漢字部　谷田熾箋

漢字部　尾﨑仁水



かな部　小川彩香

篆刻・刻字部　中西一夫

無鑑査に対する賞

院賞

・漢字部
吉瀬彩雨　庄司隆華　高岡希水
速水美恵子　目良珠山

・かな部
京　絹子

・現代詩文書部
市川紫泉　岡本要翠　金濱珀燁
佐藤麻美　佐藤弦佳

・篆刻・刻字部
中野春石

・前衛書部
後藤　恭　酒井花雪　永井朋美

毎日新聞社賞

・漢字部
平　京子

・かな部
竹尾芳江

・現代詩文書部
青野瑤春

・篆刻・刻字部
山口柏径

・前衛書部
片岡鳴驚

特選

・漢字部
青木啓子　青木雄渾　青木蘭雪
秋澤恵峰　安達恵月　安部須寿
新井春麗　飯島輝峰　一森映泉
猪原美風　上木京子　小原雅祥
加瀬作穂　加藤紫水　公文博恵
河野啓子　小松由琴　紺野遊山
齋藤翠香　渋谷愛華　渋谷蛍江
社本三和　武田鳳雲　田中琴周
千葉敏代　鶴田恵子　寺前華扇
樋泉雪篁　戸清紅秋　刀根美芳
冨原扇水　中須楽翠　中村逢春
灰原美景　花野珠美　林　草水
樋口玉葉　松本藤倖　森下祥泉
山﨑桜江　山﨑伯峰　山下律子
山本白峯　行本梨紗　吉田光春

・かな部
新谷嵐泉　太田玲子　小口明子
齋藤繁子　酒井恵子　野村　知
長谷川朝美　藤川渓泉　松井知子
松本泰子

・現代詩文書部
赤城澄江　阿部真由美　飯島理恵子
伊藤柳悦　井上　悠　井上陽洞
及川柊芳　太田緑苑　小野寺久美
小野寺悠亜　亀井芳香　木村知苑
小沼初風　西城棠花　坂倉秀苑
佐々木白涛　佐藤桂鳳　渋谷陽子
鈴木才柳　田辺香佳　玉木恵葉
内藤一華　中尾祐次郎　名取美紬
橋本綾舟　林　美法　藤田紫秋
舟寶恵美　堀籠四千　牧　薫
三浦淡虹　嶺岸清鳳　森岡瑶春
山田俊哉　遊佐香風　鷲沼好江
渡邊恵子

・篆刻・刻字部
上田静子　河原木孤邨　山本大涛

・前衛書部
浅見由紀子　薄　紅葉　大川　玉蘭
大橋久美子　岡田江風　尾山美和子
片山敬子　金子福聚　河端祥桜
菊地紅純　佐々木秀華　須藤彰仁
高橋栄杏　高橋沙緒理　髙原紗秀
田代香春　田元真始　千葉恵琴
寺島洋子　畠中成山　日野佳由
真塩初江　三浦勝代　山口曙子
横山恵津子

一般公募に対する賞

準特選

・漢字部
天野陽子　諫本節子　因幡翠紅
入野育子　薄井華千　岡林勝美
川上三男　久保智子　酒井志歩子
清水洋子　田中順子　永田良子
錦織万恵　平山和幸　深谷恵祥
堀尾由郊　水野一華　本柳久美子
山﨑翠光

・かな部
磯部真里　加藤真澄　小林美由希
筑井宏子　丸岡優子

・現代詩文書部
秋元知惠子　淺井華楓　飯島寛子
宇谷翠光　大野清玉　乙倉孝臣
斉藤典子　高橋憲子　高橋優子
津國長華　古谷知子　米谷知恵
松村玲子　茂木絢水

・篆刻・刻字部
加藤文彦　眞角碧雲

・前衛書部
大石晶子　柏木柚花　熊谷登喜子
佐々木美穂　佐藤陽子　島田知佐依
志村芽惟　下沢紀孝　都丸希美
平田悦子

≪一般・無鑑査≫ 審査風景・審査総会

㉛

漢字研究部

九成宮醴泉銘（唐・欧陽詢）①

特別研究部臨書課題＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

用紙　半紙普通判　左の法帖の中から何文字臨書してもよい。（掲載部分以外は不可）

※落款を必ず入れる
署名、もしくは
○○臨
（押印のみも可）

〈解説〉

「九成宮」とは、唐の太宗が避暑地とした離宮のことである。この「九成宮」には水源がなかったが、貞観6年、太宗が皇后と散策中に泉が湧き出しているのを発見し、これを記念して立てられたのが『九成宮醴泉銘』である。

銘文は、太宗の命により魏徴が撰文し、欧陽詢が書いた。時に、欧陽詢76歳であった。

樹參差。仰視則遙
邐百尋。下臨則崢
嶸千仞。珠璧交映。
金碧相暉。照灼雲

（91％縮小）

㊺ かな研究部　寸松庵色紙（伝紀　貫之筆）①

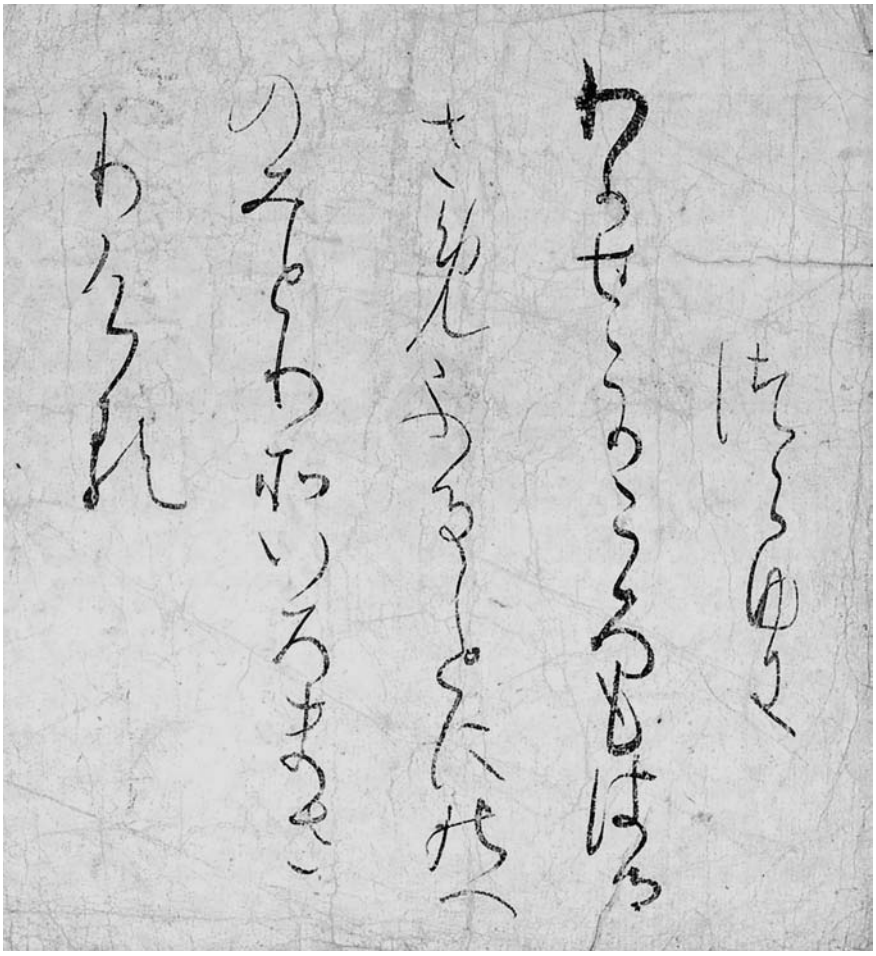
特別研究部臨書課題　＝（毎日展公募サイズ以内・縦横自由）左記の掲載以外も可

たて12.7センチ×よこ12.4センチの枠を半紙（料紙可）に書いて、その中に書く。（落款は枠内でも、枠外でも可。）

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

用紙　・半紙普通判（**料紙可**）
〈**たて長**に使用〉
・別紙を裁断して貼付は不可。

＝**注**＝　寸松庵色紙は、上の掲載部分を**全臨する**。



〈よみ〉

徒つらゆき支

可わがせこがころもはる

免さめふるごとにのべ

利所のみどりぞいろまさ

利介順りける

〈**解説**〉

『寸松庵色紙』は、「継色紙」「升色紙」とともに、平安時代の三色紙とされる。

寸松庵という名は、もと紫野大徳寺の塔頭竜光院の境内にあった茶室の名前で、茶室を建てたのは織田家の家臣で、大名茶人でもあった佐久間将監実勝である。その実勝が、堺の大徳寺派寺院、南宗寺の襖に貼ってあった36枚の小色紙の中から12枚を譲り受け、この茶室に秘蔵していたので寸松庵色紙と呼ばれた。実勝は、それぞれの歌意を扇面に描かせ、色紙と扇面を対にし、手鑑風の帖に仕立てて愛翫したという。その帖は現存し、扇面をつけた色紙も4枚確認される。

漢字規定 初段以上【五月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

方圓可施 よみ（方円施す可し）

書体＝自由

大野祥雲選書

習い方解説 (一)

大野祥雲

方圓可施

「方」厚い線で始まるが、横画は筆を吊ってすっきりと。下方は肉付きのよい線で突き出し、最終画は深い線で伸びやかに払う。

「圓」日本で作られた円が常用漢字だが、書写体で書く。一、二画の縦画をやや内側に曲げ、内部を広くし、員（貟）を左よりにして白を多くとる。

「可」横画を伸びやかに書き、気脈を大事にして左に返り、口へ進む。続けて縦画を力強く書き、はねの角度が狭くならないようにした。

「施」偏は先の方に比べ線質、方向など異なってくる。旁は筆先を生かしてキビキビ運筆。旁の上部には白が少ないが、最終画で補完の形をとる。

漢字規定 秀級以下【五月十五日締めきり】用紙 半紙普通判

小竹石雲選書

望雲之情 よみ（望雲之情）

書体＝楷書

習い方解説 (一)

小竹石雲

望雲之情（望雲の情）（舊唐書）

雲を眺めて異郷で親を思う気持ちを表した語句です。

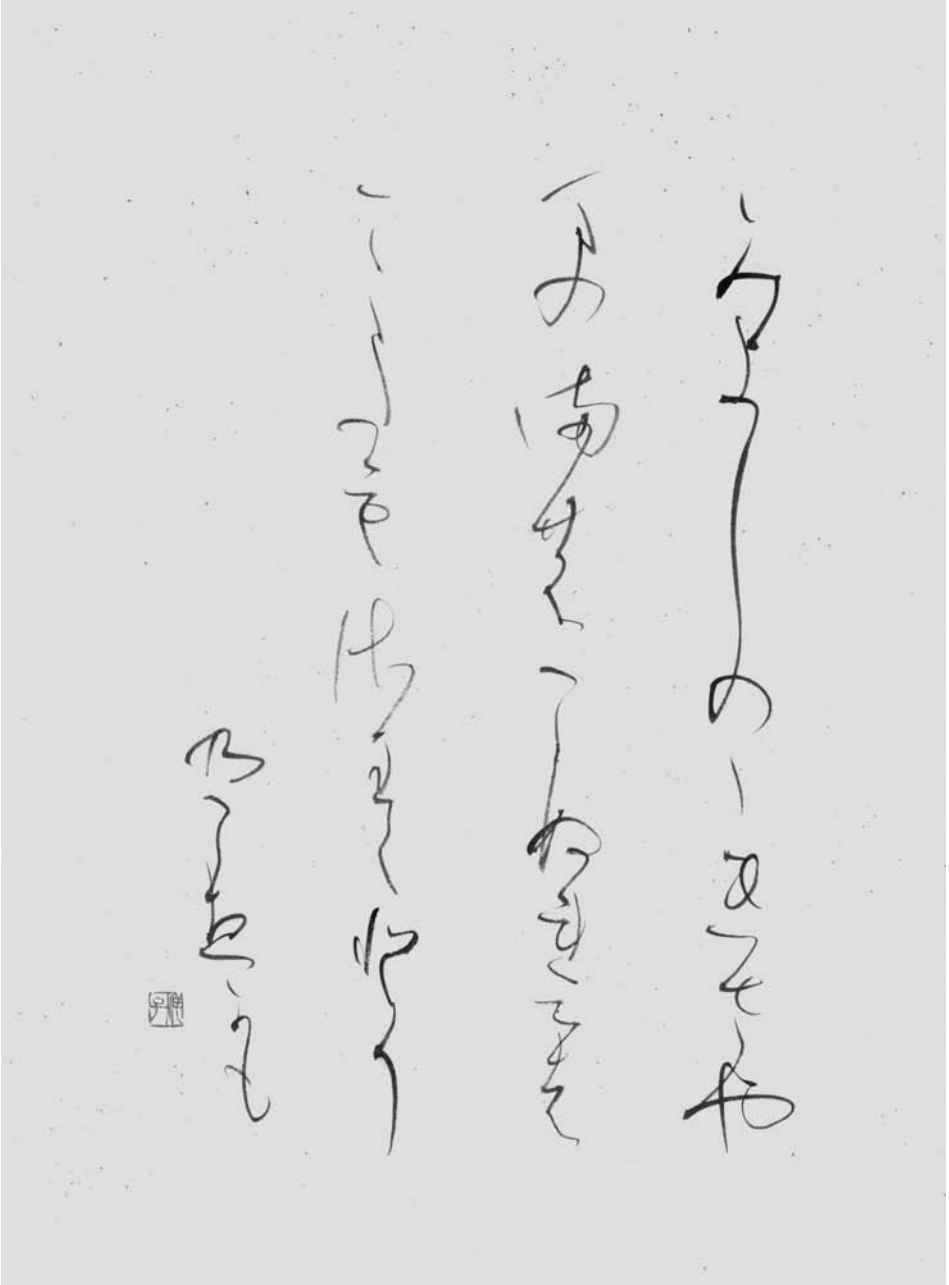
鍾繇の書風を根底において、優しく、疲れをいやしてくれるような安らぎ感で書いてみました。

創作といっても、古典の持つ格調をそなえつつ、自己表現をしたいものです。最初は倣書的なものから、自分の思いを徐々に加えていく方向で書いてみました。

参考手本をより細線にして明るく澄んだ情景を描き発展的に表現してみました。

かな規定　初段以上【五月十五日締めきり】用紙　半紙普通判（料紙可）

下谷洋子選書



よみ方　みよしのゝきさやま(万)のま(満)の(農)こぬれ(連)に(二)は(者)
こゝだ(多)も(毛)さ(佐)わ(王)く(久)と(登)りの(乃)こゑ(恵)か(可)も

創作

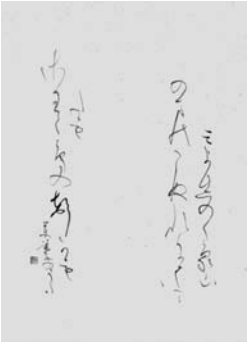
習い方解説 (一)

下谷洋子

み吉野の象山のまの木末には
ここだもさわく鳥の声かも
（万葉集・山部赤人）

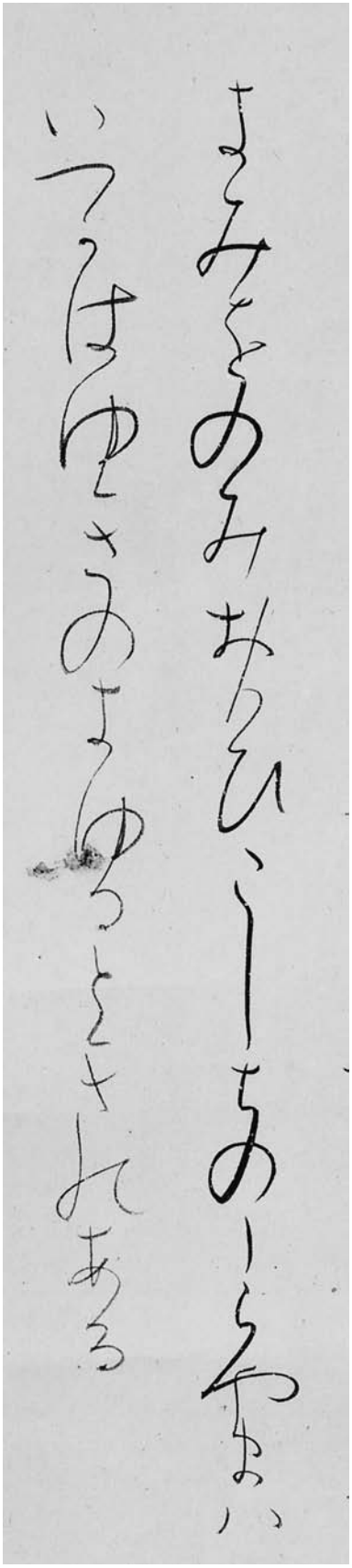
担当するにあたって、また四行書きから始めます。

単純なかなは、同じ形の文字が同じ間隔で続くのは少しも美しくなく却って不自然です。木々が風に揺れるように、◎一行の字幅が自然に広く、狭くなる◎文字が詰まったり伸びたりする（もちろんこれは、左右の行の状態でつくられる）ことが必要で、そのため自然な文字の組み方をつかむには四行書きの練習が必要なのです。いろんな四行書きが出来るでしょうが、目安は、ゴツゴツしない、滑らかに動く、左右同じにならないなど。本来は、ここに十文字程度古筆の文字が入るとより品格が出ますが、あまり気にせず創って下さい。散らし書きに移る前に是非試みましょう。



かな規定　秀級以下　【五月十五日締めきり】　用紙　半紙タテ1/2（料紙可）（たて32センチ・よこ12センチ）

掲載写真のうたを全臨、または部分（二字以上の連綿）を臨書する。

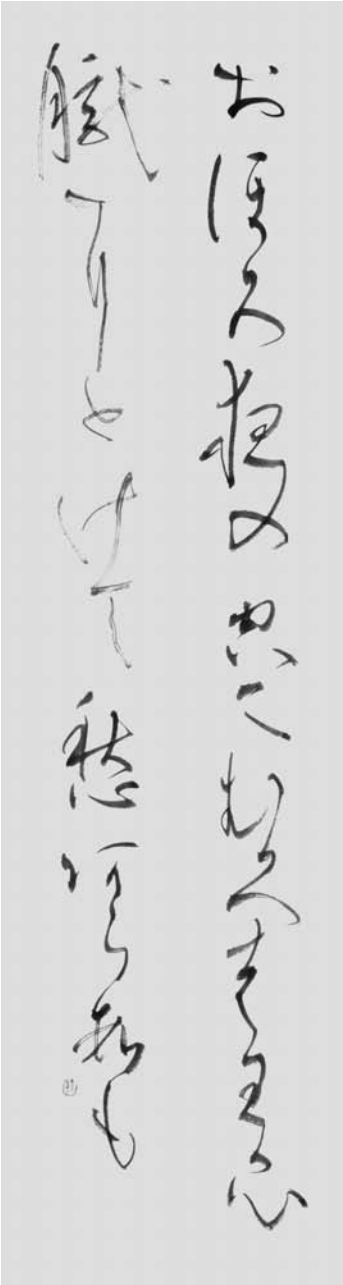


高野切第三種
（掲載写真縮小93％）

よみ方　き(支)みをのみおも(无)ひこしぢのしらやまは(八)
いつか(可)はゆきのき(支)ゆるときの(能)ある

かな条幅規定　【五月十五日締めきり】　用紙　小画仙紙半切（料紙可）

天海矩子選書



よみ方　おぼろ夜の空に(二)むか(可)へば(者)わ(王)が(可)こころ(心)
朧に(耳)溶(と)けて(天)愁あ(阿)らず(数)も

創作

習い方解説 (一)

天海矩子

おぼろ夜の空にむかへばわがこころ
朧に溶けて愁あらずも　（窪田空穂）

半切たての一般的な二行書きです。始まりを平仮名にしたので二行目は対比の意味もあり、漢字を持ってきました。墨つぎは愁でしましたが墨量を控え大きくなりすぎぬように考慮して仕上げて下さい。師範、高段者は他の構成も試みましょう。

※たて形式に限る

漢字条幅規定　初段以上【五月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

名越蒼竹選書

籠中嬌鳥暖猶眠　簾外落花閒不掃

（籠中の嬌鳥暖かにして猶ほ眠り、簾外の落花閒かにして掃はず）

書体＝自由

習い方解説（一）

名越蒼竹

初段以上の方であっても基本は大切。できるだけ書体による得手不得手の幅を小さくし、技術的な偏りが無いようにしたいものです。前半の三回は楷書・篆書・隷書を、後半の三回は行書・草書・行草書を取り上げることにしました。もちろん参考作品と同じ書体でなくても構いません。一回目は七言二句を楷書で。一部書写体です。

漢字条幅規定　秀級以下【五月十五日締めきり】用紙　小画仙紙半切

種谷萬城選書

花開還更新

（花開いて還た更に新なり）

宋―歐陽脩

書体＝自由

習い方解説（一）

種谷萬城

課題の語意は、「花はいつものように咲くが、咲いてくる花はまた新しい花である」です。初唐の三大家の一人、虞世南の孔子廟堂碑を参考にしました。数多ある楷書の名品中で、最も穏やかで品性高い楷書の古典です。原本を鑑賞・臨書し、優しい心持ちになって倣書してください。

ペン字規定【五月十五日締めきり】

上柳佳規選書

私の物差は大きい
二十億光年よりもっと遠く
私の問が反響する
うつろな百年の夜毎に

谷川俊太郎「挨拶の必要」より　佳規かく

用紙＝はがきの大きさ、白色のもの、**黒インク**使用のこと

書体＝自由

習い方解説 (一)

上柳佳規

四月から半年担当いたします。一緒に勉強したいと思います。お付き合下さい。

谷川俊太郎の「ソネット」(四・四・三・三の十四行詩)「挨拶の必要」のはじめの四行です。宇宙的なスケールの大きさを感じさせます。

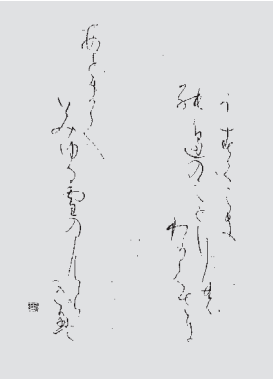
気宇壮大に書いてみませんか。

※**落款**を必ず入れる。
(**自分の名前**を入れること。)

※訂正
前号予告
誤 夜更に → 正 **夜毎に**

今月のホープ作品各部総評 NO.598

かな部　師範　儘田由美子
手本をよく消化し、限りなく大らかな独自の世界を展開して立派。この上は、創作と墨色の研究を。
◎かな部総評　紙面に相応の字粒と広がりがあります。畏縮と散漫の作多く残念。沢山書いて程よさがわかる眼を養うこと。（明子評）

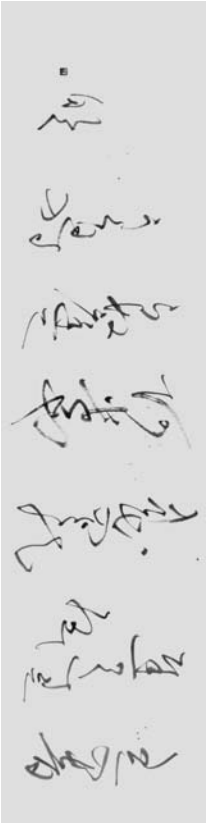


漢字条幅部　師範　川嶋　里美
骨格がしっかりした行書表現。単体ながら運筆のリズムが一貫し、爽やかな中に緊張感ある作。
◎漢字条幅部総評　古典の一節を創作することはやや難しさがあったか。色々工夫しての表現は好感もてる。下級は平凡か。（大雲評）

現代詩文書部　特選　銭谷　雪蘭
横の動きに負けない堂々とした骨格の文字と空間を切り裂く細線のリズム感が確かな位置を占める。
◎現代詩文書部総評　美しい文字の形や線質を生かして響きのある作品を！　（鄭雲評）

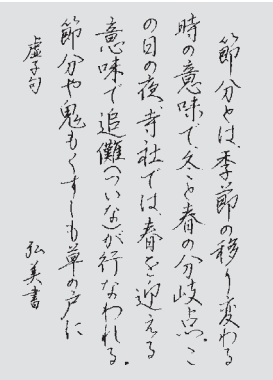
前衛書部　特選　松本　秀皐
濃墨渇筆線の動きのありバランスの取れ魅力的な表現が出来また余白も生きている作品である。
◎前衛書部総評　入選の方は文字に執着しないで肩の力を抜いて書いてみていただければ。（如水評）

かな条幅部　準師　堀江　幸泉
薄紅色の紙に淡墨でバランスよく収めた。潤渇の工夫が欲しいが、難しい行間や疎密の捉え方白眉。



◎かな条幅部総評　横展開は行の間も含め天地の余白が大切、字が大きすぎて間のないもの多かった。変体がな遅に注意！　（洋子評）

ペン字部　師範　浅野　弘美
きちっとした品格と強さのある線質で響きがある。行書で最後まで気を抜くことなく一貫している。
◎ペン字部総評　文字が小さすぎると強さに欠ける。草書のくずし方も極端になると流れが不自然になるので注意が必要。　（蒼玄評）



漢字部　師範　大坂　静枝
鶏毛筆を駆使して騒がしさがないのは長年線を鍛えたたまものだろう。落款の調和も見事である。
◎漢字部総評　書体、書風を変えるなどの挑戦をした上での提出を望む。秀級以下は楷書の徹底学習を。　（翠風評）

今月の

特別研究部優秀作品（特選）

臨書（うるいど）　橘　由紀

「曹全碑」

橘　由紀臨

136×35㎝

◆非常に丁寧で緻密な臨書です。これだけ呼気を整え書き切る姿勢にも感服。八分が流れるように美しい。（洋子評）

◆ほぼ原寸大で、のびやかさと品位の高さを見せて妙。羅紋箋の肌あいを生かし、安定した臨書作品。（大雲評）

◆曹全碑とするともう少し線に柔かさがほしいが、最後までリズムを崩さず仕上げたことには感服する。（蒼玄評）

◆みだれる事のない筆の流れすばらしい。これだけの作品をまとめる精神的統一は精神的な魅力大きい。（倫子評）

漢字（華祥）　安藤華祥

「水横觀…」

安藤華祥書

88×116㎝

◆墨色に厚味を感じさせて字が生き生きと見える。筆圧の表現の場を得ているのかも。見事です。（倫子評）

◆木簡調の精彩感溢れる作。堂々と骨気を漲らせて筆を大胆に開閉させ、このエネルギーが貴重です。（洋子評）

◆やや粗削りな筆致が紙面に充実感と動きを与えている。大胆な取り組みを買う。更に錬度を高めたい。（大雲評）

◆少々うるさい感があるが力強さは群をぬく。隷書の字形とするともう少し横をそろえたいが濃淡は可。（蒼玄評）

かな（如月）　山本由美子

「山吹の花」

山本由美子書

180×53㎝

◆大胆な筆致が動きある表情を生み、技術の確かさに裏打ちされ練度の高い作。細やかな味わいもあれば。（大雲評）

◆骨太のしっかりとした線で重厚な作に仕上った。三行目の渇筆の変化はほしい気がする。（蒼玄評）

◆大きな紙にかなの微妙な流れを表現し筆の動きもリズムを感じる。欲をいうとかすれに一工夫を。（倫子評）

◆強靭な線で安定した散らし書きの大字がな。さらに緊張感を少々ほぐすリズムの幅の広さを追求したい。（洋子評）

前衛書　（四谷）

木原尚子

「耳を澄ます」

木原尚子書

97×90㎝

◆造形が何ともおもしろい。ガウディの建物のような感じもするが強い部分もほしい。墨色の研究を。（蒼玄評）

◆墨色の重なりをある程度計算しての作品造り紙がかわいた時に思いがけない作品が出来楽しいですね。（倫子評）

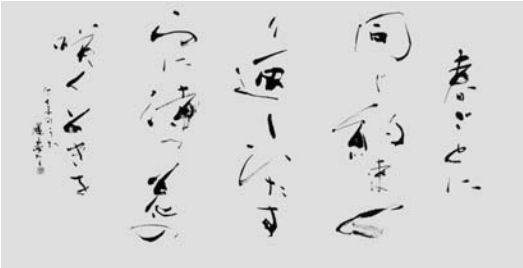
◆ほっこりとした温かさが魅力。多分筆だと思うが、表情豊かな線が楽しい。重層的な墨彩が興味深い。（洋子評）

◆ほのかな情感を漂わす暖か味ある淡墨表現。中央部に集約させ左右の余白に広がりを感じさせて妙。（大雲評）

現代詩文書　（もくせい）

西川藤象

「関ケイ子の歌」



西川藤象書

70×137㎝

◆筆先を微妙に変化させて切れるような細い線、横展開して太い線と紙面を楽しく表現した力量ステキ！（倫子評）

◆白の豊かさが、逆に締まった線の強さを際立たせ、スーッと引き込まれるような柔らかな情趣が漂う。（洋子評）

◆細長鋒筆使用か。響きの高い線がやや広めの余白を生かし、爽やかな中に懐の広い作となった。（大雲評）

◆淡々と書き上げて細い線が切れよく空間を圧している。行間に少々変化がほしいが、それは好みによるか。（蒼玄評）

臨　書　（昌苑）

木元桃苑

「曹全碑」

木元桃苑臨

113×53㎝

◆伸びやかで軽やか、しかも悠々とした筆致、貴品を感じる臨書です。落款が物足りないので一考を！（洋子評）

◆完成度の高い八分隷の曹全碑を真正面からとらえて好感がもてる作。波磔が美しい。署名落款ほしい。（大雲評）

◆のびのびと柔かく横に広がる線は白を目立たせて可。全体にリズムが感じられないのは渇筆がないせいか。（蒼玄評）

◆ゆったりとした筆の動きが全体を品よく収めている。反面欲をいうと迫力がもう少しあってもと……。（倫子評）

総出品点数 64点

創作の部（36点）
漢字 — 8点
かな — 5点
現代 — 13点
篆刻 — 1点
前衛 — 9点

臨書の部（28点）
漢字 — 25点
かな — 3点

〈特選候補者〉

（創作の部）

「漢字」
もく　森田　藤谷
墨宣　鏑木　梅道

「かな」
書泉　田子　白嶺

「現代」
うる　今関　初枝
千葉　平野　笛舟

「前衛」
月華　中塩　朱華
蓮紅　竹ノ内寿紅

（臨書の部）

「漢字」
千葉　小林　咲舟
大雲　朝倉　爽陽
英峰　佐藤　桂香

「かな」
うる　川崎小枝子
卯月　前田まさ美

漢字研究部
（曹全碑）

選評　名越蒼竹

今月のホープ作品

木元桃苑

漢字研究部　特選　木元　桃苑

線の勢いと深みにはやや物足りなさも感じられるが、起筆・収筆の処理が申し分なく、曹全碑の優美な特徴を遺憾なく再現している。分間布白・紙面構成も素晴らしい。知性を感じる臨書作品として好感が持てる。

◎漢字研究部総評

曹全碑は八分隷として礼器碑と並び称される完成期の隷書碑である。まずは用筆・運筆が楷書と異なる点に留意して臨んでほしい。一言で言えば「隷意」の感じられる臨書かどうかが評価の分かれ目となった。特に「口」や「日」といった右上の転折部が楷書のように露鋒で書かれたものが多かったのは残念。また字形が相当横広なため、四字を臨書したものは紙面構成上不利となることも考慮してほしかった点である。

清春直洋美勤
耀翠子子梢

慈遊麻恵玄一
扇山矢子城葉

善妙澄禮治弘
高邨仙子美晃

虹花り山竹嵩
雲雪か房雪柏

漢字研究部成績表

特選

秀生正八白富弘石洞英生大渋芳恵八珠大京蒼こ大蒼幕千八洞渋若洞大生容洞千紅東千樹渋江大京大生玄生大東昌
水大華街露貴舟習書峰大雲女蘭泉街巳雲華原こ雲陽張葉衛書女葉書雲大洲書葉瑤庄葉原女龍雲橋雲大象大雲峰苑

坂大有小一滝渋内木佐北朝北向渡熊宍久福島加森小中神古酒栗工濱奥菊齋川湯山岩内紺本鶴高田礎君大豊鷲亀木
井槻田川　田谷田内藤又倉村後邊谷戸保田貫藤下高村谷都井原藤田田池藤島本崎井田野多田武中貝島村田山井元
　　百　由　　　　　　　　　　　　　　　　み
初剛正白合照美皓弥桂春爽有愛信桃珠智良琴翠祥つ逢雲虹花り山竹嵩善妙澄禮治弘慈遊麻恵玄一清春直洋美　桃
江洞江柳子子子泉生香峡陽里美代華巳子子燁陽泉え春卿雲雪か房雪柏高邨仙子美晃扇山矢子城葉耀翠子子梢勤苑

秀作（60音順）

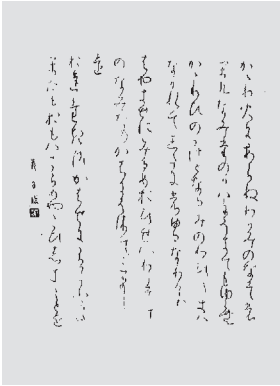
麗も森湘己有琢幕白干蒼墨紅香正樹八百皓翠恵英〃八渋東こう恵紅八芳澄う渋有さ秀〃千正銚生蒼梓恵こさ正芳
澤く地南未秋心張露潟陽宣瑤月華原街谷映柳風峰　街女小だる泉瑤街蘭春る女秋っ明　葉華子大陽江泉だっ華蘭

富戸東田多田高高高高須鈴鈴神庄清宍重佐笹佐斉西小小小木金金勝加小小奥岡大岩今猪伊石石石阿網秋明青青
田田平中田澤橋橋田木木藤木木保司水戸信藤澤木藤須林藤島村木井　瀬幡野田崎西崎津又藤毛黒井部代葉石柳木
　　　　　　　　　　　　　　　　

かな研究部
（関戸本古今集）

選評　山藤　美知子

今月のホープ作品



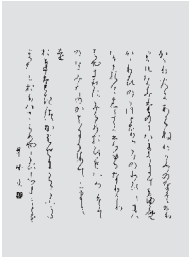
伊藤英子

かな研究部　特選　伊藤　英子

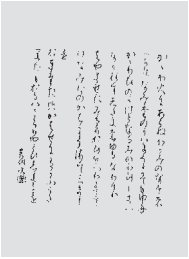
関戸古今のネバッこくてリズミカルな線、ぽったりとした線と髪の毛のような細い線をうまく表現し丁寧にかかれた練度ある明るい秀作です。

◎かな研究部総評

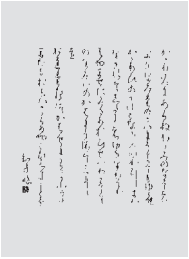
全体的に大変よく出来た作多く、入選までの人数にかぎりがあるので選外の作も決して不出来ではありませんでした。何卒飽きずに学ばれますように。



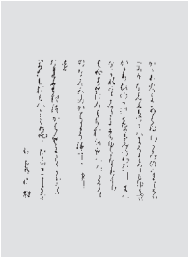
翠峰　晴雅　泉子



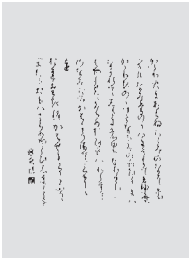
晃翠　道　香代　石

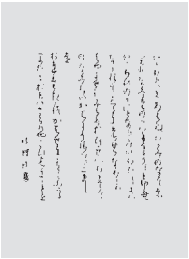


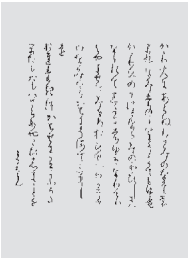
知与　祢子　子　清　耀



紅律　霞　満　津　枝子







かな研究部成績表

特選

正華　樹原　春汀　竜翠　椿澄　石習　道　明漢　玉松　大雲　正華　右田　椿翠　幸扇　春汀　宮野　高橋　平山　村岡　河合　大村　A I　竹扇　右田　椿翠　幸扇　春汀　正華　玉松　大雲　明漢　道　石習　椿澄　竜翠　春汀　樹原　正華

伊藤　奥井　藤井　小林　高橋　藤井　晴代　翠泉　伊藤　英子　峰子　雅代　晴泉　翠峰　英子　峰子　雅代　晴泉　翠峰　英子

秀作（50音順）

松澤　阿倉　久雲　もく　大翠　椿翠　桂月　A I　伊藤　安藤　新井　朝爽　倉陽　澤隆　井野元玉香　藤美寿子　井雪　藤陽　澤華　亀田　紫哲風　良泉　紫哲　亀田　浅玉　宮内　河合　藤岡　河田　村山　萩堂　高橋　宮野　松岡　磯本　嶋貝　松井　犬飼　齋藤　小林　高橋　藤井　晴代　翠泉　伊藤　奥井　藤井　晴代　翠泉　伊藤　奥井　藤井　晴代　翠泉　伊藤　奥井